松本深志高等学校音楽部
志音会演奏会

主催◆松本深志高等学校音楽部志音会

後援◆ JCDA 日本合唱指揮者協会
松本市、松本市教育委員会、SBC信越放送、
信濃毎日新聞社、市民タイムス、松本平タウン情報

2009年3月15日(日)

於：松本市音楽文化ホール
(ザ・ハーモニーホール)

開演 14:00

ごあいさつ

長野県松本深志高等学校　学校長　**高橋康人**

本日の志音会演奏会の開催、誠におめでとうございます。母校深志を巣立たれた後も、志音会として幅広く音楽活動を続けられている多くの会員の方々が、現役生も参加させて頂くご配意のもと、真心のこもった手作りの演奏会を盛大に開催されますことに対し、心からお祝いを申し上げます。

創立120年の際の「第九」大合唱、そして130年の際の「戴冠ミサ」を中心とする記念演奏会など、節目々々を彩る志音会の芸術性は、深志という学びの場にとって大きな意味を持つ存在であり続けております。音楽という媒体を通して脈々と連なるその系譜は、志音会に集う多くの方々の音楽と深志に対する深く熱い想いに支えられたものと、深甚なる敬意を表するものであります。また会員の皆様方による母校の後輩たちへの平素からの様々なご支援に対しましてこの紙面をお借りして心から御礼申し上げます。

志音会の益々のご発展と本日の演奏会のご盛会をご祈念申し上げ、お祝いのご挨拶とさせていただきます。

松本深志高等学校音楽部志音会　会長　**林　哲郎**

本日は、お忙しいところ志音会演奏会にお越しいただき、ありがとうございます。

志音会は、1996年母校120周年記念の「第九」演奏会を契機に2006年の130周年記念「戴冠ミサ」そして昨年の室内楽演奏会に続き、今回の室内楽と合唱の演奏会と、少しずつではありますが着実に活動の輪を広げております。

およそ1000人に及ぶ会員は現役の高校生から80歳代までと幅広く、音楽を職業とする者から趣味として楽しんでいる者、または卒業以来楽譜とは無縁の者まで様々であります。その中で、それぞれの音楽に対する思いをひとつにし、仕事や家庭の事情、居住地、練習時間等、様々な制約を乗り越え、その集大成として本日、客演指揮の長野力哉先生をお迎えして演奏会を開催することができますこと、大いなる喜びです。

広い世代に亘る会員ですが、各々の青春の一時期に深志高校音楽部で活動し、その熱い胸のうちを共有したという思いは皆同じであります。その延長上に今日のステージがあり、さらに大きく活動の輪が広がっていくことを願ってやみません。

時間と空間を超えて音楽に集う私達の演奏をご一緒にお楽しみください。

音楽部　部長　**上杉優貴**

この度、志音会の演奏会に参加させていただくことができ光栄です。今日は現役生のみの演奏もあり緊張していますが、精一杯演奏させていただきます。

今世界には、その日の暮らしにも困っている人たちがたくさんいます。そんな中、私達はこんなにも恵まれた環境で毎日大好きな音楽を奏でられるなんてとても幸せなことです。音楽を通して貴重な経験、沢山の出会いがあることに感謝したいと思います。

これからも先輩方が築き上げてくださった音楽部の"歴史"と"伝統"を守っていけるよう日々努力していきます。

プログラム

I. 現役合唱班

混声合唱組曲「水のいのち」より　雨　　作詩　高野喜久雄　　作曲　高田三郎

混声合唱のための「どちりなきりしたん」より　Ⅳ　　作曲　千原英喜

指揮　石川裕之　　ピアノ　小川将也（在2）

Ⅱ. 現役室内楽班

「調和の霊感」より　協奏曲第10番ロ短調　　作曲　A. L. Vivaldi

指揮　小川将也（在2）

Ⅲ. 志音会合唱団

飯沼信義編曲による唱歌

おぼろ月夜（混声）　　作詩　高野辰之　　作曲　岡野貞一

浜辺の歌（女声）　　作詩　林　古渓　　作曲　成田為三

箱根八里（男声）　　作詩　鳥居　忱　　作曲　滝廉太郎

夕やけこやけ（混声）　　作詩　中村雨紅　　作曲　草川　信

雪（混声）　　文部省唱歌

ふるさと（混 声）　　作詩　高野辰之　　作曲　岡野貞一

指揮　石川裕之　　ピアノ　中島加恵
吉野恵美子　　有賀詩織

休　憩
intermission

Ⅳ. 志音会オーケストラ

ディヴェルティメント第2番（KV137）　　作曲　W. A. Mozart

弦楽セレナーデ　　作曲　P. I. Tchaikovsky

客演指揮　長野力哉

Ⅴ. 混声合唱とオーケストラ

カンタータ 147番 より　「主よ人の望みの喜びよ」　　作曲　J. S. Bach

アヴェ・ヴェルム・コルプス（KV617）　　作曲　W. A. Mozart

美しく青きドナウ　　訳詩　堀内敬三　　作曲　J. Strauss Ⅱ

編曲　J.Yuzuriha、中島加恵

合唱編曲　津川主一

客演指揮　長野力哉

プロフィール

客演指揮　**長野力哉**
（ながの りきや）

1960年東京生まれ
桐朋学園大学音楽学部卒業
指揮を小澤征爾、山田一雄、尾高忠明、小泉和裕の各氏に、ピアノを小森谷泉氏に、対位法を尾高惇忠氏にそれぞれ師事。1987年より西ベルリンに留学。ベルリン芸術大学においてカール・ビュンデ教授に師事する一方、小澤征爾氏の推薦を受けベルリン・フィルハーモニー管弦楽団のもとで1987年から1990年の間行われた全てのリハーサル・レコーディングに立ち会い、研鑽を積んだ。これまでに東京都交響楽団、神奈川フィルハーモニー管弦楽団、仙台フィルハーモニー管弦楽団、上野の森交響楽団、横浜フィルハーモニー管弦楽団、京都フィロムジカ管弦楽団、長野県フィルハーモニー管弦楽団、福岡教育大学管弦楽団、千葉大学管弦楽団、専修大学管弦楽団、三友合唱団などを指揮。全国各地に於いて幅広い指揮活動を行っている。

指　揮　吉野恵美子
（よしの えみこ 18回卒）

松本深志高等学校・東京学芸大学教育学部音楽科声楽専攻卒業。声楽を瀬山詠子氏に、指揮を伊藤栄一氏に師事。二期会合唱団にソプラノパートリーダーとして13年間在団中、オペラ、ミュージカルなどの各種コンサートやテレビ、レコーディングなどで演奏。世界三大テノール（ドミンゴ、カレラス、パヴァロッティ）らともステージを共にしている。退団後、群馬県太田市、栃木県足利市、東京都、安曇野市、松本市でアマチュアコーラスの指導に当たる傍ら、サロンコンサートなどのソロ活動を行っている。1998年、長野冬季オリンピック文化プログラムのオペラ「信濃の国・善光寺物語」の合唱指導で好評を博す。2000年よりサイトウ・キネン・フェスティバル「1000人の合唱」・「200人の合唱」に指導スタッフとして毎年参加、今年度の公式プログラムであるブリテン作曲「戦争レクイエム」の合唱指導にもあたっている。松本市において2005年「カルメン（ハイライト）」、2006年「ニューイヤーコンサート」、2007年まつもと市民オペラ「こうもり」、2009年まつもと市民オペラ「椿姫」の合唱を指導。志音会においては、深志高等学校創立120周年・130周年記念コンサートにおいて合唱指揮を務めた。

現在、日本合唱指揮者協会会員。NHK文化センター松本「オペラへの誘い」講師。

指　揮　石川裕之
（いしかわ ひろゆき 33回卒）

松本深志高等学校卒業。筑波大学大学院修了。これまでに筑波大学混声合唱団、飯田市民合唱団などに所属し、現在は「合唱団まい」に所属。現在、松本深志高等学校教諭、音楽部顧問。

ピアノ　中島加恵
（なかじま かえ 51回卒）

北安曇郡池田町出身。松本深志高等学校卒業。3歳よりヤマハ音楽教室で音楽の基礎を学んだ後、ピアノ、エレクトーン、作曲等の指導を受ける。ヤマハ JEC 全日本大会 '94 銅賞、'95 銀賞 受賞後、演奏活動を開始。長野冬季五輪等各地でのソロコンサートをはじめ、様々な演奏者、合唱団等とも共演。東京芸術大学音楽学部作曲科卒業後は演奏活動の他、ピアノ、ソルフェージュ、和声学等の指導も行う。CM 等映像音楽の制作にも携わり、第 52 回カンヌ国際広告祭 ブロンズ、第 42 回ギャラクシー賞 CM 部門大賞等、国内外で多数受賞。2006 年、故郷、信州安曇野に拠点を移し、様々な分野に挑戦している。これまでに作曲を高橋裕、夏田昌和、馬場法子の各氏に、作曲理論を尾高惇忠、川井学の各氏に、ピアノを岡野寿子、皆川暁子、小林由紀の各氏に、エレクトーンを笠原芳子、小林陽一、矢口理津子の各氏に師事。現在、長野県塩尻志学館高校 非常勤講師。

ピアノ　有賀詩織
（あるが しおり 54回卒）

松本市出身。松本深志高等学校卒業後、桐朋学園大学カレッジディプロマコースピアノ専攻を経て、桐朋学園大学作曲理論学科音楽学専攻を卒業。日本音楽教育における合唱教育について研究する。長野県ピアノコンクールにおいて優秀賞、奨励賞受賞。「ピアノトリオの夕べ」にて雨田光弘氏らと共演。ジョイ・オブ・ミュージックマスタークラス、エマニュエル・パユ&エリック・ルサージュによるマスタークラス受講。これまでにピアノを花岡千春、野溝千春、阿部美果子、江澤聖子、和声学を原田敬子、音楽学を西原稔の各氏に師事。男声合唱団「クール・ビア」「波田少年少女合唱団」「志音会」ピアニスト。第2回松本市民オペラ「椿姫」コレペティトゥアを務める。現在、長野県松川高等学校（飯田工業高等学校　兼）講師。

プログラムノート

I. 現役合唱班

本日は演奏の機会を与えていただき、ありがとうございました。私達合唱班1・2年生によるステージでは、祈りの世界を表現したいと思います。

混声合唱組曲「水のいのち」より　雨

作詩者の高野喜久雄氏および作曲者の高田三郎氏は、ともに敬虔なるカトリック信者です。1965年に発表され、日本の合唱組曲の中で最もよく知られ歌われてきた「水のいのち」ですが、この曲の中に込められたものが「神の愛」についてのメッセージ、そして「神への祈り」であると捉えた時に、今までこの組曲を歌ったことのある方の中には異なる解釈が生じる方も少なくないと思われます。

第1曲「雨」の中では「神の愛」を「雨」にたとえ、「無償の愛」は全てのものに対し平等に降り注ぎ、立ちすくみ横たわるものをよみがえらせ、救済するものとして、その恩恵に対する感謝の表現を曲にこめていると考えました。私たちはこの曲を賛美歌であると解釈し、祈りと感謝の思いを深く静かに表現したいと思います。

混声合唱のための「どちりなきりしたん」より　Ⅳ

作曲者の千原英喜氏は前作「おらしょ -カクレキリシタン3つの歌-」の姉妹作として2002年にこの作品を発表しました。「どちりなきりしたん」とは1600年に長崎で和訳されたキリシタン本の「Doctrina Christum」のことで、宣教師たちによって日本に紹介された「キリスト教教義」を意味します。作曲者は当時のキリシタン文学とラテン語による典礼文をテキストとし、400年前の人々の祈りの声を想像しながら神の栄光に対する信仰の世界を表現しました。

今回取り上げた第4曲では、ラテン語典礼文の「Tantum ergo」(大いなる秘跡)を軸として神への信仰宣言を述べたものです。典礼文の部分はグレゴリオ聖歌風に描かれている一方で、和訳された教義においては日本民謡風の旋律や和音が用いられ、このコントラストにより、400年前の隠れキリシタンの人々の世界観が表現されています。　（班長　川窪　優）

II. 現役室内楽班

みなさんこんにちは。松本深志高校音楽部室内楽班です。今回このような素晴らしいステージでの演奏が出来るということは非常にありがたいことです。

今日、弾かせていただく曲は、ヴィヴァルディ作曲「12の協奏曲<調和の霊感>op3」より第10番です。この「12の協奏曲<調和の霊感>op3」はヴィヴァルディの名声を決定的にした名曲ですが、ヴィヴァルディの音楽自体が見直されたのは数十年前だった、というのはご存知でしょうか。そうした発掘されて間もない彼の音楽が、今現在では広く世間に受け入れられ、"巨匠"の名にふさわしい地位と名声を手に入れているという事実は、彼の数々の協奏曲が、構成面、技巧面など様々な面において卓越したものを持っていたということでしょう。

こうした名曲の素晴らしさを全て伝えきる、というのはなかなか難しいかもしれませんが、精一杯の演奏をしたいと思います。

（班長　深井 隆達）

III. 志音会合唱団

世代の声を集め、合わせて・・・ 飯沼信義（作曲家・深志9回卒）

今回は私の編曲による懐かしい日本の歌を6曲歌ってくださるということで、演奏の皆さんに心から感謝を申し上げます。どれもご存知の曲ばかりなので付言を要しませんが、ひとつだけ、「編曲」ということについて書かせていただきます。編曲とは編曲者の側のひとつの「聴き方」である、ということができます。つまり、この歌をこう聴きたい、こんな身形（みなり）衣装で自分の耳元に届いて欲しい・・・という、いわば編曲者の我儘な願望なのです。ですから私は編曲に際して気のすむまで一人で何回も何回も歌ったりピアノを弾いたりして適切なテンポや響きの在りようをつかもうとします。ただし、我儘にも一定の節度の自覚が必要です。度肝を抜くような奇異な衣装を纏わせることなどは控えなくてはなりません。「歌たち」は私一人の所有物ではなく、皆の大切な財産であり宝物なのですから。ご一緒に楽しんでいただければ、と切に願っています。

最近、これまで放置していた自分の作品の整理を始めました。漫然と仕舞い込んでいた楽譜や音源をひっぱり出し、残すもの、捨てるものを選り分けているのですが、そんな過程で1955 ～ 60年頃の「志音会」や「とんぼ祭」の演奏会の録音テープが数本出てきました。それらを聴いて驚いたのは、当時の音・声・歌い回しなどが同じ調子で今日まで営々脈々と続いている・・・ということでした。別の言い方をすれば、当時の深志現役生や卒業間もない者達が共有する世代の記憶と、身に沁み込んだ歌心が半世紀の時を経ても即再生可能である・・・ということです。人間、歳とともに音域も声質も変化しますが、そうした個々の声を集めれば、不思議にも、その中から「深志の音と香り」が聞こえてくるというのは何とも愛らしく素敵なことではありませんか。志音会の名のもと、それぞれの世代の歌の声、管弦の音を一堂に集めてこうした演奏会を催すことができるのは類例を見ない稀有なことだと思います。この催しが誇り高く末長く続くことを切に願っています。

プログラムノート

Ⅳ. 志音会オーケストラ

W. A. モーツァルト 「ディヴェルティメント 第2番 変ロ長調 KV137 (125b)」

娘：モーツァルトの「ディヴェルティメント」って、サイトウ・キネンのアンコール曲でも有名よね。

父：あれはKV136の第2楽章だな。かつて齋藤秀雄が学生に、厳しくアンサンブルの練習をつけていた曲だ。

娘：そう、弦楽の為のディヴェルティメントは3曲あるのよね。どれも軽快で、聴いているだけで爽やかになるわ。

父：通常「ディヴェルティメント」はもっと楽章が多いものなんだけど、この3曲はどれもメヌエットなしの3楽章だけ。「後でシンフォニーにするつもりだったのでは?」とも言われているんだ。

娘：そう言えば、ここにオーボエやホルンが加われば、もう立派な交響曲、って感じよね。第2番と呼ばれている、この「KV137」は、3曲の中ではあまり聴かないけど。

父：一番変わっていて、とても面白い。楽章ごとにテンポが早くなっていく構成や、3楽章とも同じ変ロ長調だという点も興味深い。モーツァルトが16歳の時に書いたこの曲は・・・

娘：えー、16歳って高校3年くらいじゃない! 私と同じ年代で作った曲だなんて、信じられないわ。

父：イタリア風の感性も持つ新鮮な食材を、長野さんという一流シェフの棒で、高校生を交えた弦楽メンバーがどう料理するのか。重厚なチャイコフスキーの「弦セレ」という、メインディッシュの前の曲としても、楽しみだな。

娘：もう、すぐ料理に置き換えちゃうんだから! 今日はデザートに「ウィンナ・ワルツ」もあるわよ。

Ⅰ. Andante 3/4：ゆっくりとした楽章から始まり、曲全体として穏やかな印象

Ⅱ. Allegro di molto 4/4：一転して速い楽章。簡潔なソナタ形式で、各パートの掛け合いが楽しい

Ⅲ. Allegro assai 3/8：さらに軽快なイメージを持つ3部形式の舞曲。コース料理の前菜に最適 (Viola 宮入 徹 33回卒)

P.I.チャイコフスキー 「弦楽セレナーデ ハ長調 OP48」

この曲は、1880年の9月から10月にかけてウクライナのカメンカで作曲された。彼の6つの交響曲の作曲過程でいうならば、第4番と第5番の間に位置する作品である。

セレナーデは18世紀後半古典派の時代に好んで作曲され、モーツァルトの例が特によく知られているが、この曲は、《ソナチネ形式の小品》《ワルツ》《エレジー》《ロシアの主題によるフィナーレ》という4つの楽章構成でも明らかなように、古典派のセレナーデ様式とは直接関係はなく、自由なスタイルによって書かれた作品である。

後援者のメック夫人にあてた手紙の中で「きっと満足してもらえるに違いありません」と書いているように、自身この作品の出来栄えには、たいそう自信をもっていたようである。曲はモスクワ音楽院の教授アルブレヒトに献呈され、初演は1881年10月18日にペテルブルグで行われている。 (Cello 長縄 建三 18回卒)

Ⅴ. 混声合唱とオーケストラ

J. S. バッハ 作曲 カンタータ147番より 「主よ人の望みの喜びよ」

「主よ、人の望みの喜びよ」という名で知られるこのコラールは、1723年に作曲されたカンタータ「心と口と行いと命」(Herz und Mund und Tat und Leben)の中の1曲です。確固たる信仰心を表すような、一歩一歩踏みしめるように進んでゆく低音部、あふれ出る信仰の喜びに満ちた、高音部の流麗な3連符に導かれ、合唱が「イエスは常に私の喜びです……私は心と視界からイエスを離しません」と、確固たる信仰、主イエスへの愛、信仰の喜びを歌っていきます。

W. A. モーツァルト アヴェ・ヴェルム・コルプス KV617

1791年、モーツァルトが死の半年前に作曲した作品です。「ave」という言葉は、「幸がありますように」という意味です。「verum corpus」は「まことの御体」、これはイエス・キリストのことです。人間の罪を一身に請け負って十字架につき、罪深き人間たちを救って下さったイエス・キリストを歌ったものです。歌詞の中には、「主イエスが十字架につけられ、脇腹を槍で刺し貫かれ、血と水を流した」という、受難の場面も含まれますが、モーツァルトは、表面的な激しさをもって表現することはしませんでした。あくまでも美しい、絶妙な転調が繰り返され、それによって、イエスの受難は罪深い私達に内面化されます。わずか46小節ですが、「レクイエム」と並び称される珠玉の作品です。

ヨハン・シュトラウスⅡ世 美しく青きドナウ

毎年ウィーンフィルハーモニー管弦楽団のニューイヤーコンサートで演奏され、「オーストリアの第2国歌」とさえいわれる、ウィンナワルツの定番ですが、元々は1867年に男声合唱付きの管弦楽曲として作曲されました。

1866年の普墺戦争でオーストリアはプロイセンに負け、国内は暗く沈んでいました。当時ウィーン男声合唱協会の指揮者だったJ. ヘルベックは、「人々を励ましたい」と、シュトラウスに合唱曲の作曲を依頼しました。こうして生まれたのがこの曲であったのですが、当初はあまり評判がよくなかったようです。合唱団員が書いた「くよくよせずに踊れ!」といった歌詞が、あまりに直接的で、むしろ粗野ですらあったため、といわれます。そこで、管弦楽曲に書き直したところ、人気が急上昇しました。のちに歌詞も書き換えられ、現在演奏される形となりました。合唱の編成も、オリジナルの男声合唱版だけではなく、混声版、女声・同声版（ウィーン少年合唱団の演奏などでも知られています）があります。本日は混声、堀内敬三による格調高い日本語訳で演奏します。

なお、合唱版と管弦楽版では、曲の終わり方が違います。曲は序奏部に続いて、5つのワルツが切れ目無く続いていきますが、合唱版は、最後の第5ワルツが終わるとともに全曲が終わります。一方管弦楽版には、第5ワルツのあとに、最初の主題の回帰を伴った長大なコーダが付されています。管弦楽版に慣れ親しんだ方は、終わり方の違いを楽しまれてもよいでしょう。 (指揮 松本 純一郎 34回卒)

出演者

志音会合唱団

Soprano

小澤　瑠奈（5）　中田　道子（5）　耳塚　眞弓（5）　高根　恒子（14）　鴻田　康子（15）
吉野恵美子（18）　藤森三千代（19）　駒村　尚子（22）　卯之原紀子（27）　中村友規子（30）
保坂美代子（31）　赤塚　友香（在2）　伊東　麻美（在2）　熊澤　真優（在2）　千葉　広菜（在2）
上村早紀子（在1）　上村　千尋（在1）　蜂谷　真央（在1）　中村　綾子（友）

Alto

折井　寛子（5）　花村　恭子（5）　小山　武子（6）　大久保富子（12）　草間　昭子（14）
丸山　妙子（15）　井口　基子（19）　倉科小百合（21）　小沢　公子（26）　河口　恭子（28）
勝谷　桂子（30）　征矢ひろみ（32）　野尻　光（32）　北澤　玲子（33）　田口　太美（39）
川窪　優（在2）　北野　志歩（在2）　田口ひかる（在2）　金城　実来（在1）　小林　陽子（友）
松本　紀子（友）　山嵜　久子（友）

Tenor

太田　良則（5）　小川　尚克（6）　斉藤　道男（6）　古厩　恭久（6）　岸辺　和夫（7）
堀江　清一（9）　飯沼　勝浩（12）　宮本　昭彦（12）　有田　直之（13）　上島　敏（19）
杉山　敦（25）　竹淵　哲雄（29）　石川　裕之（33）　松本純一郎（34）　竹内　巧（43）
村上　正大（46）　横沢　篤（54）　上野　雄介（在2）　中村　悠基（在2）　石曽根理浩（在1）
小林　良也（在1）

Bass

耳塚　舜（5）　浅川　博光（8）　沼波　鋭二（12）　野口　洋一（14）　三才　萬里（15）
田川　浩（17）　上條　正名（18）　林　哲郎（19）　上野　千尋（25）　小林　秀男（28）
岩尾　捷平（在2）　仁科　利彦（在2）　吉川　朝日（在2）　井上　雄大（在1）　郷津　星地（在1）
宮崎　廉（在1）

志音会オーケストラ

First Violin

牛山　正博（23）　堀口　洋子（13）　山田　哲（18）　小笠原理美（19）　倉澤　郁文（24）
黒河内　健（28）　市江　純子（30）　牛山　千史（55）　小岩井悠太（在2）　小山　星花（在1）
西川　真理（在1）

Second Violin

等々力康友（15）　三浦　佳子（16）　冨田　則子（18）　東　麻里子（20）　波多腰玄一（20）
尾崎　伸子（21）　檀原　文代（33）　氷川　明子（40）　平沢　重太（55）　牛山　孝介（58）
手塚　希望（在2）　中山　祐樹（在2）　深井　隆達（在2）　武田　洸晶（在1）　安川　昂志（在1）

Viola

宮入　徹（33）　雨宮えりか（31）　長岡　邦彦（42）　寺島希容子（45）　高橋美穂奈（47）
上杉　優貴（在2）　竹平　愛恵（在2）　笛木　綾乃（在2）　井崎　遥（在1）　棟田　裕一（友）

Cello

寺澤　克義（賛）　長縄　建三（18）　千田　義孝（21）　小原　伸一（34）　岩尾　捷平（在2）
小川　将也（在2）　河西　美旺（在2）　井上　果純（在1）　市江　雅芳（友）　佐藤　雅美（賛）
寺島　洋行（賛）

Bass

支倉　早奈（38）　柳沢日出夫（38）　井上　麗美（賛）　柳沢　由香（賛）

（　）：数字は卒業回、（在）：在校生、（友）：友情出演、（賛）：賛助出演

SHIONKAI

校歌

松原威雄 作詞
岡野貞一 作曲

一、蒼溟遠き波の涯
たてり大和の秋津洲
そのうるはしき名を負へる
黒潮たぎる絶東に
光栄の歴史は三千年
蜻蛉男児に栄えあれ

二、時の流れは強うして
自治を生命の若人は
山河秀でし此の郷に
この世の旅は長けれど
強き「力」に生くるかな
礎固し我が母校

三、暁こめて鳴り出でし
世の先駆者の名に恥ぢず
移らふ星を数べて
時代の鐘を身にしめて
心を磨き身を鍛へ
守るも久し深志城

四、朝に仰ぐ槍嶽に
夕筑摩の野を行けば
鳴呼学術の香に集ふ
深き真理を探りつゝ
胸に充ちくる想華あり
契りも深き友九百

五、古城空しく苔古りて
清き心のひとすぢに
自治の大旗翻へし
濁世の波は高けれど
志あるますらをは
前途遥かに望む哉

松本深志高等学校音楽部志音会スタッフ

会長	林 哲郎 (19)		
副会長	牛山 正博 (23)	杉山 敦 (25)	矢野 信也 (31)
会計	駒村 尚子 (22)	小林 秀男 (28)	勝谷 桂子 (30)
事務局長	上野 千尋 (25)		
事務局	堀口 洋子 (13)	上條 正名 (18)	長縄 建三 (18)
	市江 純子 (30)	中村友規子 (30)	
ホームページ担当	宮入 徹 (33)	寺島希容子 (45)	
合唱指揮	吉野恵美子 (18)	石川 裕之 (33)	松本純一郎 (34)
ピアニスト	臼田由香里 (29)	中島 加恵 (51)	有賀 詩織 (54)
	田中 梢	金岡 泉	
スペシャルアドバイザー	飯沼 信義 (9)		
志音会オーケストラ団長	等々力康友 (15)		
ステージマネージャー	宮澤光太朗 (45)		

( )：数字は卒業回

ちらし・チケット・パンフレット表紙デザイン：駒村つかさ（51回卒） パンフレット作製・印刷：有限会社 井上印刷